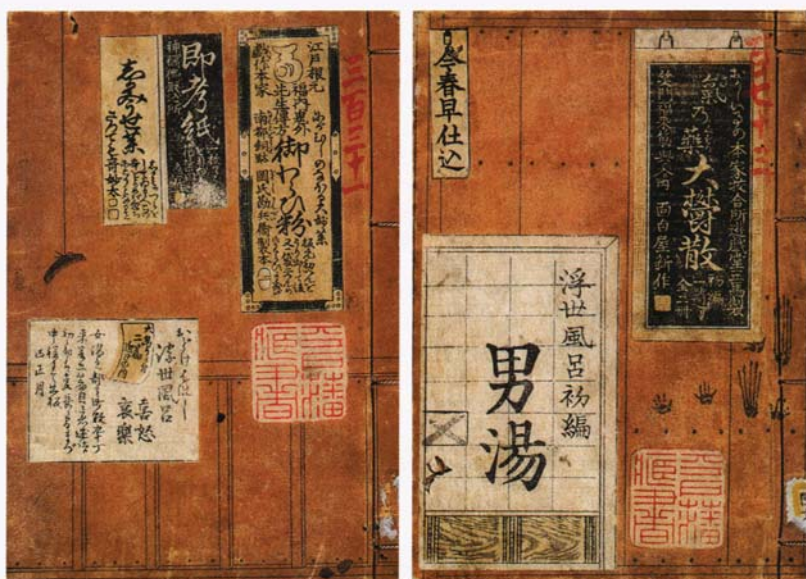


# やまとの名品

天理図書館



うきよぶろ しきていさんば  
浮世風呂 (式亭三馬著)

4編9冊 文化6年(1809)~10年(1813)刊  
縦18.4cm 横12.7cm

江戸時代、庶民の社交場と言えは床屋と銭湯でした。そこでは日常会話から世間のうわさ話、亭主や女房の愚痴までも飛び出す、誠に興味深い情景が繰り広げられていました。

江戸後期の戯作者、式亭三馬（一七七六～一八二二）はその面白さに目を向け、代表作とも言える『浮世床』と『浮世風呂』を著しました。

その一つ、『浮世風呂』では前編・四編で男湯、二編・三編で女湯の風景を描いています。入浴客の軽妙な会話を、その身分や職業、或いは出身地による言葉遣いによって書き分けた文章からは、可笑しくも活気溢れる

江戸庶民の日常生活を、生き生きと感じ取ることができます。

また、十返舎一九の『道中膝栗毛』と共に滑稽本の傑作とされる本書は、初代三笑亭可楽の銭湯話を基に増補したとあって、さながら落語の一場面を見るような作品でもあります。

一方、会話をありのままに描こうとした三馬は、「常のにござりうちたる外に白圈をうちたるは、いなかのなまり詞にて（中略）がぎぐげこの濁音としり給へ」と、ガ行鼻濁音の使用を記録しており、作者の意図しないところで日本語史上の重要な資料ともなっています。

全四編の内、文化六年刊の



「前編」版木は刊行後まもなく焼失し、文政三年（一八二〇）に覆刻再版されましたが、この天理図書館蔵本は焼失前の数少ない初版です。

カットは入浴客で賑わう中、二階の娯楽室に上がってゆくお侍。

（天理図書館 大西光幸）